みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

近代中国における毛沢東崇拝の成り立ち

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000825

韓　敏編『近代社会における指導者崇拝の諸相』
国立民族学博物館調査報告　127:35-60(2014)

第2章　近代中国における毛沢東崇拝の成り立ち

韓　　敏
国立民族学博物館

1. はじめに

本論文の目的は20世紀前半，社会主義近代国家の形成，中国ナショナリズムの台頭と指導者崇拝の関連性を明らかにするものである。中国共産党・政権・軍の創設者の１人である毛沢東という人物に焦点を当て，その軍事的，理論的カリスマ性と指導者崇拝がどのように党内で生み出され，一般社会に浸透して，ナショナル・シンボルとして確立したのかを，歴史学，政治学と人類学の文献調査および筆者自身による史跡の現地調査を通して考察する。

20世紀前半，列強による勢力均衡の崩壊と２度の世界大戦により，世界各地で独立運動や民族運動が勃興し，独立国家，近代的国民国家の建設がアジア，アフリカとラテン・アメリカの政治的主流となった。一方，20世紀は，近代の資本主義のグローバル化，そして資本主義的近代化のオルタナティヴとしての社会主義の世界化の時代でもある。そのような時代において，ナショナリズムの形成は必須であった。

20世紀における独立国家や近代国家の創設という大きな社会転換の中，伝統的価値観念，習俗，法律をくつがえすような，革命的性格をもつカリスマ的人物が必要とされると同時に，新政党や新政権にとっても，強力な誰か，あるいは何かをもちいてその政党やネーションの理念と存在を具現化するのが，必須作業でもある。

20世紀前半の中国共産党とその政権にとって，自らの存在を具現化するシンボルは，毛沢東であった。毛沢東[1)](1893年～1976年）は，中国共産党にとって，党・政権・軍の創設者，最高の指導者であると同時に，カリスマ的であり，既存の国民党支配による中国の社会秩序，既存のマルクス・レーニン主義の理論体系に挑戦するような革命的な指導者として知られている。毛沢東に対する崇拝は，延安時代（1934年～1947年）に始まり，建国初期，文化大革命，改革開放時期の４つの歴史段階を経て今日に至っている。すなわち，形成期（1930年代～1949年），安定期（1949年～1960年代初期），全盛期（1966年～1970年代）と後期（1970年代から現在）である。この期間，程度の差こそあれ，毛は一貫してマルクス主義の中国化，中国共産党・軍・政権のシンボルとして崇拝されてきた。

本論文は形成期（1930年代～1949年）に焦点をあて，毛沢東の党・政権・軍における支配的地位の確立，軍事的・理論的，イデオロギー的カリスマと思想の確立，一般社会

への浸透という３つの側面から中華人民共和国設立までの毛沢東崇拝の成り立ちとメカニズムを考察する。

2. 権力と個人崇拝

毛沢東の崇拝は，まず，共産党内部，その政権とその軍隊における支配的地位の獲得によって確立されたものである。

彼は，どのようにして無名な田舎の青年から世界で最大の人口を有する国の最高指導者の地位にたどり着いたのだろうか？

1893年12月26日に，毛は湖南省湘潭県韶山村の農家の長男として生まれた（写真1,2)。その年は，清仏戦争勃発の年であり，また，孫文等による革命の組織「興中会」結成の年でもあった（表１)。毛が生まれる前に，２人の男の子を幼くして亡くしていた毛の母は，今度こそわが子が早死にしないで，無事に健やかに成長できるようにと，巨大な観音石を毛沢東の義理の母にして，名前も「石三伢子（石の三番目のこども)」と名づけた。家の跡継ぎとして大事に育てられた毛は1900年７歳の時，村にある塾に通い，中国の古典，四書五経を勉強しはじめる。この年は，義和団の乱が起こった年にあたる。10年後の1911年，辛亥革命により，清朝が倒れ，孫文は共和国臨時政府大統領に就任した。

このような激変の時代に育ち，幼いころから反抗的だった毛は，1913年20歳の時，父の反対を押し切って，湖南省都長沙にある近代的学校，第四師範学校へ通い始めた。田舎から都会の長沙に移った彼は，初めて西洋や東洋の学者や政治家によるさまざまな書物を読む機会ができて，日増しに急進的な青年になり，次第に共産主義者に変身していった。

1916年，学生だった蕭植蕃（蕭三）と毛が長沙で黄興の葬儀に参加した日本人の革命家の宮崎滔天に手紙を書いて，講演するよう依頼した。孫文の辛亥革命を支えた宮崎滔天は，その要請に応じて，湖南省立第一師範学校でアジアの振興，黄色人種の団結を趣旨とする講演を行った。

毛沢東は，1918年に他の学生10数人とともに「学術を革新し，品行を磨き，人心風俗を改善する」ことを基本理念とした新民学会を組織したが，1919年の五・四運動[2)]の中で，多くの会員がマルクス主義に傾倒するようになり，学会の基本理念も「中国と世界の改造」に変更された。1920年後半，師範学校付属小学校の主事（校長）となり，新民学会の会員を中心とする共産主義グループを校内に組織した。

1921年７月にソ連共産党・コミンテルンン[3)]の強力な援助と主導のもと，北京大学文科長の陳独秀，北京大学図書館長の李大釗，北京大学図書館の助手だった毛ら，12人が中国各地の共産主義組織を代表して，上海で中国共産党第１次全国代表大会を開催し，中国共産党を結成した（写真３)。

写真１　毛沢東の実家　韶山　1994年韓敏撮影

写真２　毛が生まれた両親の寝室　1994年韓敏撮影

写真３　上海黄陂南路374号にある中国共産党第一回大会が開催された建物　2010年韓敏撮影

創設時に無名な若者であった毛沢東が党の支配的地位にたどりつくには主に３つの要素がある。すなわち，中国の社会実情にあう農民運動と土地革命の提唱，農村を根拠地とする戦略と戦術，理論的成熟による脱ソ連とコミンテルンである。これらの要素は，のちに彼のカリスマ性を生み出す源泉となる。

表１　毛沢東関連年表

年代	毛沢東関係	国内と世界情勢
1840		～42年　アヘン戦争
1847		６月　共産主義者同盟の創立。
1848		日本，明治維新 ２月　マルクス＝エンゲルスの『共産党宣言』発表。
1866		孫文，広東省に生れる。
1867		『資本論』第１巻刊行
1870		レーニン生れる。
1883		カール・マルクス死去。
1893	毛沢東，湖南省湘潭県韶山村に生れる。	清仏戦争，孫文等の「興中会」結成。
1894	韶山村の数人が日清戦争に参加。毛沢東の父は返金をさけるために従軍する。	日清戦争
1898		清光緒帝下の「百日改革」失敗。康有為等が日本へ亡命。清朝の改良立憲君主制主張。
1900	伝統的塾に通い，四書五経を勉強しはじめる。	義和団の乱
1904		～５年日露戦争
1905		同盟会結成，民族・民権・民主が採択される。
1906	父に塾を辞めさせられ，故郷で父の農業を手伝う。	
1907	14歳で両親の取り決めで羅一秀と結婚させられる。	
1910	韶山村を離れ，西洋の教育を受けるために都会の長沙にいく。	
1911	学生だった毛沢東が叛乱軍に参加。６月後，脱退。	辛亥革命，孫文は共和国臨時政府大統領に就任する。
1913	湖南省立第四師範学校に入学。初めて西洋の学者の書物を読む。	
1914	湖南省立第一師範学校に編入。東西融合論の楊昌済恩師と出会う。	中華革命軍結成
1916	10月　孫文の同志でアジア主義者の宮崎滔天が長沙で黄興の葬儀に参加した際に，蕭植蕃（蕭三）と毛の要請で宮崎が湖南省立第一師範学校でアジアの振興，黄色人種の団結を趣旨とする講演を行った。	ロシア十月革命
1918	蔡和森と進歩的青年組織「新民学会」創設。25歳で湖南第一師範学校卒業。恩師の楊昌済教授とともに上京。北京大学図書館の助手。李大釗と陳独秀はマルクス主義研究会を組織，毛も参加。	第一世界大戦終わる。
1919		３月　コミンテルンがモスクワで成立する。 五・四運動，国民党成立。
1920	27歳で恩師楊教授の娘，楊開慧と結婚	
1921	中国共産党成立大会に出席，湖南の党書記に選ばれる。	７月　中国共産党上海で成立，蒙古革命。
1922		ソ連世界初の社会主義国成立，孫文はレーニンの代理と会い，ソビエトの援助受け入れと，中国共産党と統一戦線を組むことに同意する。

1924		レーニン死す。
1925	五・三〇事件後農民運動に専念，土地革命の必要を説く。	孫文死す。五・三〇事件
1926	「中国社会各階級の分析」発表。	
1927	「湖南農民運動考察報告」発表。 農民蜂起を指導して失敗。江西井岡山を革命根拠地に労農紅軍を組織してソビエト政権を樹立する。	４月　蒋介石は反共クーデター。国共合作分裂。共産党員が五分の四減。１万。共産党は地下潜行へ。
1928	毛と朱徳合流。「中国紅軍」創設。	
1931	江西省瑞金の中華ソビエト臨時政府主席となる。	
1933	党指導部が毛に代わって中央革命根拠地における主導権を掌握。	１月　中国共産党本部が上海から江西省瑞金に移転。
1934	第２次全国ソビエト大会で，中華ソビエト臨時政府主席に再選。	紅軍は，1934年10月18日江西根拠地を放棄，「長征」開始。
1935	毛沢東は中央書記処書記（現在の中央政治局常務委員）に選出されて新指導部の一員となり，周恩来の補佐役となる。８月19日，周恩来に代わって軍事上の最高指導者の地位につく。	貴州遵義会議。博古らソ連留学組中心の党指導部は軍事指導の失敗を批判されて失脚。 紅軍は10月18日にソ連に近い陝西省呉起県につく。長征終焉。
1936	７月16日　陝西保安で毛がアメリカ人ジャーナリストスノーと会見。『中国革命戦争の戦略問題』を発表。	７月　中共中央が保安に移住。 西安事件
1937	スノーによる『中国の赤い星』出版 『矛盾論』，『実践論』発表 東北民主聯軍が毛沢東肖像入りの勲章発行。	１月13日　中共中央が延安に移住。日中戦争
1938	５月『持久戦』発表。 10月中国共産党第６期中央委員会第６回全体会議において，毛は初めて「マルクス主義の中国化」の概念を提出する。	
1939	延安で江青と結婚する。	
1940	１月　毛「新民主主義論」発表	
1942	延安魯芸の王朝聞による毛沢東肖像レリーフ完成。 王式廓による毛のカラー肖像版画を模範的労働者の表彰式に贈呈。	王明やモスクワ仕込みの教条主義を対象に延安整風運動開始。
1943	劉少奇から毛沢東は「マルクス主義の中国的，あるいはアジア的形態を創出した」功績を讃えられる。 解放区大型グラフ誌『晋察冀画報』９月より毛沢東の肖像写真が掲載され始める。 農民李有源による毛沢東を賛美する歌曲「東方紅」出現。	周恩来は党員数80万，軍隊および訓練された民兵50万，解放区における人口１億を超すと発表。 「毛沢東思想」の表現がはじめて王稼祥によって使用される。 スターリンの命令により，コミンテルン廃止。
1944	３月　山東省戦時郵便総局による毛の肖像を図案化した切手発行。	米国陸軍視察団が共産党政権の首都延安に着く。連合軍はノルマンジーに上陸。ルーズベルト大統領再選。
1945	大会で毛沢東思想が党規約に指導理念として加えられ，６月19日の第７期１中全会において，毛沢東は党の最高職である中央委員会主席に就任する。 15名の主席団員には，凌子風作製の毛バッジが贈られる。出席者に毛の肖像画が印刷された記念ノートと記念マッチも配布。	２月　ヤルタ協定は台湾の中国への返還を約束。 ４月　共産党第７回全国大会。党員120万，軍95万と発表。 ５月　ドイツ敗戦 ８月６日　トルーマンは広島原爆投下。８月日本降伏，第２次世界大戦終わる。

	大会終了後，華東解放区の華中銀行が毛の肖像写真入りの紙幣を発行。	8月29日～10月10日　アメリカ大使ハーレは毛沢東を飛行機で重慶に招き，蒋介石と会談させる。
1946		国民党と共産党は「連合政府」について合意達せず，6月　全面内戦開始。ソビエト・ロシア占領下の東ヨーロッパの社会主義化開始。
1947		解放区で土地改革，農地均配を実施する。
1948	3月23日　毛と中央部が陝西省北部を去る。	
1949	10月1日　毛が北京の天安門壇上で中華人民共和国成立を宣言。	アメリカは中国から外交団を引き上げる。
1950		朝鮮戦争。10月　中国人民志願軍が参加。

2.1　中国の社会実情にあう農民運動と土地革命の提唱

当時の軍閥および北京政府に対抗するために1923年に開催された第3回中国共産党大会において，孫文の率いる国民党と共産党による「国共合作」の方針が決議された。

1924年1月，毛沢東は第1回国民党全国代表大会で国民党中央執行委員会の候補委員に選出され，国民党上海支部の組織部書記として，労働組合のオルグに力を注いだが，1925年，上海の五・三〇事件[4)]以降は，徐々に農民運動に専念するようになり，その活動を通して中国革命において農民問題のもつ本質的意味を再認識した。

1926年に発表した「中国社会各階級の分析」（毛 1926：3-17）の中で，貧農を革命の主力とし，地主から土地を接収することを主張した。この論文は「農民を重視する点において，中国革命における毛沢東路線形成の旅立ちの位置を占めるといっていい」（野村 1978：320）。ところが，ソ連からの影響が強く，都市部の労働者を重視する当時の中国共産党指導者の陳独秀に拒絶され単行本には印刷されず，また共産党の理論誌たる「嚮導」「新青年」などにも掲載されずに，結局，国民党農民部の機関誌である「中国農民」に掲載された（岩間 2007：183）。

農民運動を重視し，土地革命を主張する彼の指摘は，中国の実情にあうものであった。ただし，「毛沢東の『分析』は，彼の独創などではない。数え切れないほどの犠牲をともなう多数の革命的な労働者農民知識人の命がけの試行のうえにつかみ取られた中国革命の基本的方向だったのである」（岩間 2007：261）。

1927年1月～2月，毛はさらに湖南省の湘潭・湘郷・衡山・醴陵・長沙の五県で農民運動の調査を行い，「湖南省農民運動の視察報告」（毛 1927：19～72）を発表した。その中で彼は中国共産党内外にあった農民の革命運動に対する批評にこたえ，農民社会の中国における土地革命の必要性を説き，中国革命の主力軍を農民の中に見いだした。毛の主張は普遍性のあるとされるマルクス主義を，農業社会の中国で実践する場合に生じたローカリゼーションの理論的課題の解決を試みたものである。すなわち，中国の実情に合わせて，中国式の社会主義革命を模索したのである。

2.2　農村・農民重視の戦略と戦術

孫文の死後，1927年４月12日その後継者である蒋介石の上海クーデターにより，国民党と共産党の合作は崩壊した。大きなダメージを受けた中国共産党の指導者たち，ソ連留学組の瞿秋白，李立三，王明らは，国民党との全面対決の姿勢をとり，都市労働者の組織化と都市での武装蜂起，ソビエト[5)]政権建設という急進主義路線を進め，その結果，共産党は，国民党勢力によってことごとく打ち砕かれ党員数が激減した。

このような危機状況の中で８月７日，漢口で開催された党中央緊急会議（「八七会議」）において，毛沢東は，「武力で政権を打ち立てる（槍杆子里面出政権）」と訴え，革命活動の重点を都市から農村に移し，地主の土地を奪い農民に分配する土地革命とソビエト政権建設を結合させ，農村根拠地で革命を起こし，農村をもって都市を包囲し政権の奪取を目指そうと主張した。この提案が認められた。

その後，湖南と江西で農民蜂起を指導したが，失敗した。湖南省と江西省の境にある井岡山に立てこもり，最初の革命根拠地とした。1928年朱徳と合流して，「中国紅軍」を創設した。1929年から1931年にかけて，湖南省・江西省・福建省・浙江省の各地に農村根拠地を拡大し，地主・富農の土地・財産を没収して貧しい農民に分配するという「土地革命」を実施した。いまでも歌われている民謡，「三湾来了毛委員（毛委員がやってきた）」は，この時期，井岡山の永新県三湾村でできたものであり，村が革命の根拠地となり，新しいタイプの人民の軍隊ができた熱気が窺われる。

三湾来了毛委員，　　三湾には毛委員がやってきた	
帯来工農革命軍，　　労働者・農民の革命軍をつれてきた。	
創建人民新軍隊，　　新しいタイプの人民の軍隊を創設し，	
三湾改編換新顔。　　三湾はすっかり変わった。	

1931年11月，江西省瑞金に全国九ヵ所の革命根拠地の代表が結集して，第一回全国ソヴェト代表大会が開かれ，中華ソヴェト共和国の樹立が宣言され，毛沢東は中華ソビエト臨時政府主席となった。

しかし，農村革命根拠地を中心とする彼の方式やゲリラ作戦は，コミンテルンの強い指導下にあったソ連留学組中心の党指導部から批判され，1932年10月毛は軍の指揮権を失い，彼の推進していた「土地革命」も中止に追い込まれた。

1933年１月，中国共産党の本部が上海から瑞金に移転してきた。国民党から激しい包囲攻撃をうけ，根拠地を維持できなくなった共産党の紅軍は，1934年10月から瑞金の根拠地を放棄して，新たな根拠地を求めるため，長征に出た。国民党軍と戦いながら，陝西・甘粛一帯（延安）へ，約12500キロメートルを歩いて移動した。当初30万の勢力が３万に減少したといわれる。

長征の途中の貴州省遵義で1935年１月に中共中央政治局拡大会議が開かれ，大都市攻

撃重視の王明，博古らソ連留学組中心の党指導部は軍事指導の失敗が批判され，毛沢東の出番が求められ，中央書記処書記に選出されて新指導部の一員となった。ロデリック・マクファーカーは，この遵義会議は，のちに中国共産党およびその軍隊における毛沢東の指導的座につくスタートポイントであると指摘している（MacFarquhar 1974）。

上記のように農村を根拠地にする戦術が功を奏していることが共産党紅軍の危機によって証明された。言い換えれば，蒋介石の国民党攻撃による共産党の危機は，毛の軍事的カリスマを生み出したきっかけといえる。

紅軍は1936年10月にソ連に近い陝西省呉起県につき，長征が終了した。紅軍は，ここで陝甘寧辺区の解放区をつくった。1937年に延安市は，その首府とされ，以降1947年にいたるまで党中央の所在地であった。

そこで毛沢東を中心とする指導者たちが活発な政治活動と著作活動を行い，中華人民共和国を作るための軍事的，政治的，理論的体制を整えた。そのため，延安は今でも中国の革命聖地とされている。現在，唐代に建てられた九重の宝塔山，鳳凰山，楊家嶺，棗園などに残されている当時の党の施設や指導者の居住した部屋が観光スポットとなっている（写真４）。

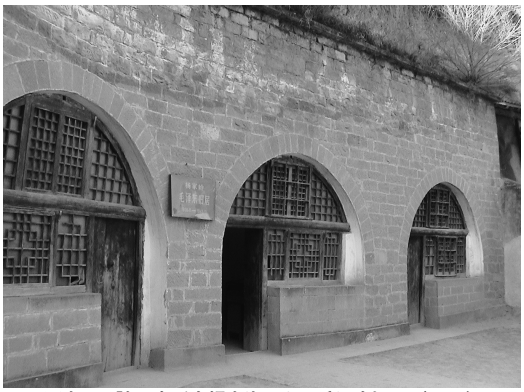

写真４　陝西省延安楊家嶺にある毛沢東旧居（1938年11月-1943年10月）2003年韓敏撮影

当時は全国で抗日の機運が高まり，共産党も積極的に抗日運動に参加するようになった。1936年12月の西安事件をきっかけに一致抗日に向かい，1937年７月の蘆溝橋事件を経て第２次国共合作が実現した。抗日戦争において共産党は救国ナショナリズムを全面的に強調して，ゲリラ戦を展開するなかで勢力を急速に拡大した。共産党の「八路軍は一年たらずで３万人から30万に拡大した後，軍隊の将校たちが毛沢東の戦略と戦術を信じるようになった」（王若水 2002：40）。このように彼のカリスマ性が日本との戦争状態，国家危機の中でさらに強調された。1937年に毛の肖像入りのバッジが東北民主運動の勲章として発行されたのは，その例である。

3. マルクス主義の中国化と毛沢東思想の形成

このように中国社会の実情に合う毛沢東の軍事思想の勝利，抗日戦争による救国ナショナリズムの高揚に伴い，中国共産党によるマルクス・レーニン主義の解釈権，革命の戦略・戦術および党内人事における脱コミンテルンの動きが出てきた。中国社会の実情にあう中国化・土着化されたマルクス・レーニン主義の考え方――毛沢東思想は，このような背景のもとに形成された。

中国的マルクス主義を形成するために決定的に重要であったのは，20世紀中国の歴史状況をめぐる以下の三つの戦略的次元である（ダーリク 1994：241）。

その第一はグローバルな次元：19世紀以降，中国は資本主義を支配的に原動力とする世界史のなかに余儀なく引き込まれた。中国の社会主義者の基本目標は，そのような世界システムへの組み込みに対抗することであった。

第二の次元は第３世界の次元：中国は，大部分のアジア・アフリカ社会とともに歴史とその原動力なる資本主義とその世界化（グローバリゼーション）を，内発的発展としてではなく外在的なヘゲモニーとして経験したのであった……社会主義はたんに資本主義に対するオルタナティヴであったばかりでなく，資本主義のヘゲモニーからの民族的解放と世界史に客体としてではなく独立した主体として参加する可能性を約束するオルタナティヴでもあった。

第三は，ナショナルな次元：エリック・ホブズボウムによれば，資本主義は非資本主義社会をみずからの軌道に引き入れることにより世界史を創出したものの，この世界化の過程はそれと反対のプロセスを作動させることになった。それは，19世紀末，各々が固有の歴史をもつことを主張して国民国家を形成しようとした，あの世界規模での政治的再編成のプロセスである。中国ナショナリズムもこのプロセスの産物にほかならない。

しかし，普遍性のあるとされるマルクス主義を受容する場合，しかも現地の民衆の言語に翻訳し直し，その論理を，現地の実用にあわせ，実践するというローカライズの必要がある。中国革命のプロセスそのものがマルクス主義のグローバル化とその中国化，土着化を同時に内包するものであった。

1938年10月，毛沢東が中国共産党第６期中央委員会第６回全体会議において，初めてマルクス主義の中国化の概念を提起した（高 2000：179）。彼はその会議で，「民族戦争における中国共産党の地位」を発表した。この報告は三日間かけて行われ，討論には一ヶ月余りを費やした。この講話は中央委員会の討論を経て，手を加えられ，のちに『新段階論』として1938年11月25日の延安で刊行された『解放週刊』の第57号で発表された。

「わが民族には数千年の歴史があり，独自の発展法則，民族的特徴，数多くの優秀なものを持っている……孔子から孫中山にいたるまでの歴史を総括して，その貴重な遺産をうけつ

ぐべきである。マルクス・レーニン主義の偉大な力は，それがそれぞれの国の具体的な革命の実践とつながっていることにある。中国共産党としては，マルクス・レーニン主義の理論を中国の具体的環境に応用することを学びとらなければならないのである。偉大な中華民族の一部であり，この民族と血肉のつながりをもつ共産党員でありながら，中国の特徴をはなれてマルクス主義を論じるとすれば，それは抽象的な空虚なマルクス主義に過ぎない。したがって，マルクス主義を中国で具体化し，その一つ一つの表現のなかにそれがもつべき中国の特質をもたせること，すなわち中国の特徴にもとづいてマルクス主義を応用すること，これは全党が早急に理解し，また解決しなければならない問題である」。（毛 1938：279～280）

毛沢東によるマルクス主義の中国化の必要性の提起は，社会主義的近代における土着的なものの主体性や中国社会の歴史的遺産を考慮する主張であり，その後の彼の思想の誕生および理論的指導者の権威の確立につながった。

この思想は海外では毛イズム[6)]，マルクス主義の中国化，毛沢東のマルクス主義などと呼ばれている。毛沢東の革命思想は，広義的に取り上げる場合，戦略と戦術，世界認識，当面の社会主義建設の理念などを包括した中華人民共和国の国家的イデオロギーを指すが，本論文における毛沢東思想は，中華人民共和国建国までにマルクスとレーニンが確立した共産主義を指針としながら，それを中国の実情に適応させた，農民を中心とした中国の革命方式を指している。

この思想に関する表現で，最初に現れたのは，1941年３月に張如心[7)]が雑誌『共産党員』の第16期で発表した「論布爾什維克的教育家（ブルシェビキの教育者を論じる）」という論文である。その文章のなかで，「毛沢東同志の思想」という概念が初めて提起され，「毛沢東同志の言論と著作はマルクス理論と中国の革命実践との結合による典型的な結晶であり」，党の教育人材は「レーニンとスターリンの思想，毛沢東同志の思想に忠実にすべきである」と述べた（王進ら 1992: 622）。すなわち，個人の思想でありながら，中国社会で実践され，証明されたマルクス主義であることを意味すると同時に，毛沢東はソ連のレーニンとスターリンと並んで，理論的指導力をもつことを示している。

党・政権・軍隊における毛沢東思想の確立を促進させたのは，1942年～1945年にかけて延安で行われた整風運動である。

整風運動とは，1942年～1945年に，中国共産党が，党員の思想と活動態度の刷新を目的として行った思想改造運動をいう。「整」は中国語では「正す」という意味で，「風」は「態度」，「習慣」を意味する。延安整風運動のおもな矛先はマルクス主義の理論やコミンテルンの指令を絶対視し，外来のモデルを盲目的に中国革命の現実に適用しようと人びとに向けられた。この運動は毛沢東が主導し，王稼祥[8)]が実務を担当した。

1942年２月整風運動の初期において張如心は「学習和掌握毛沢東的理論和戦略」を発表し，そのなかで，「毛沢東同志の理論と戦略はマルクス・レーニン主義理論と戦略が植民地と半植民地の封建社会において応用され，発展されたものである」（王進ら 1992：

622)。

建党22周年の際に1943年７月４日に中央書記処書記の劉少奇は「党内のメンシュヴィキ（少数派）思想を清算せよ」の中で，「すべての幹部，すべての党員は22年間の中国共産党の経験をよく研究して…毛沢東同志の思想を用いて自分を武装し，毛沢東同志の思想を用いて党内のメンシュヴィキ思想を清算せよ」と述べた。

その直後の1943年７月８日に王稼祥は，延安の『解放日報』において「中国共産党与中国民族解放的道路」の文章を発表して，「毛沢東思想は中国的マルクス主義，中国的ボルシュビズムと中国的共産主義であり，マルクス・レーニン主義と中国の革命運動の実際の経験と結ばれた結果である」と解釈し，初めて「毛沢東思想」という言葉を用いた。このときから，「毛沢東同志の思想」は「毛沢東思想」に変わった。

３年間の整風運動を通して，毛は自らがマルクス主義の中国化という言説を武器にして，政敵を討ちながら党の幹部を洗脳し，ソ連やコミンテルンの影響力を排除し，自らのマルクス主義の解釈権，イデオロギー的権威を確立することに成功し，党内指導者としてのカリスマを形成したといえる。

整風運動の意義については，党の思想を正すものとして，肯定的に受け取られる一方，最終的には，中国共産党による迫害同然の運動としてとらえる見方もある。当時のコミンテルンのフラジミロフは，延安整風は事実上コミンテルンとモスクワで訓練された共産党員に対する排除であるという受け止め方もあると述べている（王若水 2002：71)。また整風運動の大部分は，毛沢東が中国共産党の最高指揮官であり独裁者である身分を獲得するために行われたとの見解もある（高 2000)。

このように，毛は1937年から自ら進んで，マルクス主義の中国化・土着化を推進し，整風運動を通して，党・政権・軍隊におけるマルクス主義の中国化を本格化させた。それはのち第７回中国共産党大会で承認された党規における指導的指針である毛沢東思想の制度化，毛沢東崇拝の確立のための理論的準備でもあった。

毛沢東崇拝の本格化は，第７回党大会に始まった（王若水 2002：111)。党・政権・軍における支配的地位とイデオロギーの権威としての毛の地位の最終的確立とその視覚化のクライマックスは1945年４月23日～６月11日まで50日間に渡って行われた中国共産党第７回大会である。延安の楊家嶺中央大講堂で開催されたこの大会の出席者は正式代表547人，候補代表208人で，当時の全国の121万の党員を代表していた。

会場である中央ホールは，第７回党大会のために建てられ，洞穴式になっている。石材を多く使用したので，木材を節約した（劉，周 1995：13)。このホールは毛沢東における支配的地位とマルクス主義の中国化を視覚的に表象している。

中央ホールの演壇の一番上には12文字の扁額「在毛沢東的旗幟下勝利前進」が懸かれ，その下にはマルクス，エングルス，レーニン，スターリンの４人の小さい肖像が掛けられている。塑像の下に中国共産党第７回全国代表大会の横断幕が掛かっている。その下

には中国共産党・政権と軍隊を象徴する朱徳と毛沢東の巨大な肖像が飾っている（写真５）。

写真５　陝西省楊家嶺の中央大ホール。2003年韓敏撮影

ホール両側の内壁には24本の党旗が飾ってあり，中国共産党が1921年成立してからの24年間が象徴されている。ホールの後ろには毛沢東の巨大写真が飾ってある。その下には「同心同徳」の四文字が掛かれている。中央大ホールの配置とそこに見られた表象は，マルクス・レーニン主義を信奉しながら独自性・主体性をもつ中国共産党のあり方および党内における毛沢東の支配的位置付けを示している。

また，各地の部隊や地方政府から贈られてきた多くの錦の旗も飾ってある。たとえば，劉伯承，鄧小平が率いた第129師からの「在毛沢東軍事思想上団結起来，争取中国人民解放的勝利（毛沢東軍事思想のもとに団結し，中国人民の解放を勝ち取ろう）」，林彪と聶栄臻の第115師からの「在毛沢東同志旗幟下更堅固的団結山東党的隊伍，領導着三千八百万人民向中華民族中国人民与無産階級的徹底解放邁進（毛沢東同志の旗のもとに山東にある党の部隊がより一層団結し，３千800万の人民を率いて中華民族・中国人民の徹底的な解放に邁進）」（写真６），陝甘寧辺区政府からの「全党在毛沢東的旗幟下，向着勝利，向着中国人民徹底解放的大道前進（毛沢東の旗のもとに，党全体が勝利，中国人民の徹底的解放への道へ前進）」などがある。

劉少奇は「党規約の改正についての報告」を発表し，その中で，毛沢東を「中国の歴史のなかでもっとも偉大な革命家であり，政治家であるばかりではなく，中国のもっとも偉大な理論家であり科学者である」と称え，彼の思想を体系的に論じ，それは党の「すべての工作を導く」上で必要である，とのべた。大会で採択された新しい党規約には「中国共産党がマルクス・レーニン主義の理論と中国革命の実践を通して統一した思想――毛沢東思想を自らのすべての活動の指針とする」ことが記入された。

写真６　陝西省楊家嶺の中央大ホールの内部。
2003年韓敏撮影

第７回党大会において毛思想が党規約に指導理念として加えられ，同年６月19日の第７期党中央委員会第１回全体会議において，毛沢東は中国共産党中央委員会主席に就任し，彼の権威と権力は全党的なものとなった。

4. 毛の肖像，グッズ，題字と歌謡からみる社会への浸透

共産党・軍・政権における指導権の確立，マルクス主義の中国化の完成および抗日救国ナショナリズムの高まりにしたがい，毛沢東の名前は中国共産党，あるいは中国の代名詞として中国および海外に知られるようになり，彼の肖像や題字が共産党政権の象徴，イデオロギーのシンボル，抗日救国ナショナル・シンボルとして共産党政権が発行した紙幣，切手，共産党および非共産党系の新聞，書物などの刊行物に登場するようになり，著作の印刷，販売と学習が盛んにおこなわれた。この節では毛沢東の肖像，新聞などのマスメデイアにおける題字，歌，また外国人記者を通して，ナショナル・シンボルの社会へ浸透していったツールとメカニズムを分析する。

4.1 公的空間における毛沢東肖像の使用

毛沢東バッジの出現が，抗日戦争の時期であることは一般説である。1930年代，延安の革命根拠地にあった抗日大学の学生たちが歯磨きのチューブで毛沢東，マルクス，エンゲレス，レーニン，スターリンのバッジを作っていた（Schrift 2001：59-60）。バッジを用いた毛沢東崇拝のルーツは抗日戦争時期の延安に求められる（川田 2000：104）。遵

義会議２年後の1937年に東北民主連軍が肖像入りの勲章を発行した。「この勲章の出現をもって毛沢東への個人崇拝の萌芽を確認できる」（川田 2000：112）。

とくに1945年４月23日第７回全国大会開幕式において，講壇の上に座った15人全員が毛の肖像入りのバッジをつけていた。錫で作られた初めての金属材料のバッジである。作成者は当時延安にある魯迅芸術学院で先生をしていて，のちに映画監督になった凌子風と魯迅芸術文学院の学生たちである。

バッジのほかに，大会の参加者には毛の題字「為人民服務」が印刷された七大の記念パンフレット，「実事求是，力戒空談」という題字が印刷されたノート，肖像入りのマッチ，ハンカチなどの記念品が配布された（劉 1992：６）。マッチは陝甘寧辺区火柴厂によって製造されたものである[10)]。マッチの正面には毛の肖像，後面には第７回党大会のために書いた手記「深入実際，不尚空談」が印されており，側面には「陝甘寧辺区火柴厂敬贈」が印刷されている（吉 2001：96）。日常用品における毛沢東の肖像の登場は，当時国民党による孫文崇拝を意識して作ったと考えられる[11)]。

この第７回全国大会の終了後，華中銀行から肖像写真入りの紙幣が発行され，国家象徴のメディアとしての重要な機能を果たす中国の紙幣に毛沢東が初めて登場した。また，毛誕生日の直前の1945年12月22日，個人写真集『中国人民の偉大なる領袖　毛主席近影集』が晋察冀軍区政治部晋察冀画報社によって5000部発行された。これは最初のアルバムであると同時に，建国前の唯一のアルバムである。中には肖像を含む12枚の写真が収められている。

整風運動のさなかの1943年に完成した中央党校大講堂の正面玄関の外壁には，毛沢東の肖像レリーフと自筆の「事実求是」のスローガンが掲げられた。「今でも天安門楼閣に毛沢東の肖像が掲げられているように，中国共産党が関与する聖なる場所に肖像を設置するようになったのは，延安の中央党校が最初である」（川田 2000：114）。

また，切手に毛の肖像がはじめて登場したのもこの時期である。内藤氏は「1944年３月，山東抗日根拠地全体の郵政業務を統轄する機関であった山東戦時郵務総局によって発行されたのである」と指摘し，背景には「整風運動の余波を受けて，毛沢東個人崇拝が中共の組織を挙げて展開されはじめた…山東戦時郵務総局が発行した切手は，整風運動という歴史状況の産物であると同時に，その後の毛沢東個人崇拝の先兵的な役割を果たしたものと位置づけることも可能だろう」と述べている（内藤 1999：25, 33）。

4.2 題字

５千年の文字の歴史を持つ中国では，権力者による題字は，中国の歴史と文化における権威の現れとして機能し続けてきた。毛沢東が中国共産党・政権・軍において支配的地位に登りはじめた延安時代から毛の題字が頻繁に共産党の内外に現れるようになる。

中国の権威的国家アーカイブズ機関である中央檔案館によれば，1949年10月１日の中

華人民共和国建国までに，毛沢東は，公に110回の題字を書いた（中央檔案館 1984）。この時期の彼による題字は，個人，労働英雄，烈士，個人の誕生日・葬儀，幼稚園，児童デー，国際勤労婦人デー，アメリカ・ニューヨーク華僑クリーニング店聯合会，華僑，幹部学校・医科大・党校などの学校，学生，共産党・軍・政権にかかわるさまざまな会議，記念日，新華書店[12]，雑誌，新聞紙などさまざまな分野と場面にわたっている。

まず，題字が顕著に現れているのは，新聞紙の名前である。

毛沢東が初めて中国共産党の新聞紙に題字を書いたのは，1940年に延安で創刊された『辺区群衆報[13]』という新聞紙である。この後，1941年５月16日に延安で創刊された『解放日報』のためにも題字を書いた。『解放日報』は，延安時期の中国共産党中央の政治理論を扱う機関紙である[14]。

また，1945年11月１日に創刊された『東北日報』は，中国共産党が東北解放区の中で作った初めての新聞紙であり，中国共産党東北局政権の機関紙である[15]。国民党との激しい内戦の中で，新聞社が瀋陽から本溪，海龍各地へ移動し，その間に一次中止したこともあったが，1946年４月28日『東北日報』は長春で復刊され，それ以来毛沢東の題字を使い始めた。その後，新聞社がハルビンに移動し，1946年12月18日再び新聞の題字を変えたが，毛沢東がみずからその題字を書いた。その題字は，1954年８月31日まで使われた。

『人民日報』は1946年６月15日に河北省平山县西柏坡で中国共産党華北局によって，晋冀魯豫中央局機関誌として創刊された。毛沢東はこの新聞紙に２回も題字を書いた。１回目は，1946年，当時晋冀魯豫辺区の中央局が大型機関紙の創刊準備を行い，『晋冀魯豫日報』あるいは『太行報』というタイトルを考えていた。当時党中央主席であった毛沢東はその新聞紙創刊企画の報告を聞いて，『人民日報』と改名した。1949年３月に『人民日報』は北京に移転し，同年８月に正式に党中央党機関誌として発行され，今日に至る。現在，中国ではもっとも影響力と権威性のある新聞であり，新華社，中央テレビ局と並んで中国共産党と中国政府の三大メディアとみなされ，ユネスコによって世界でもっとも影響力のある十大新聞紙の一つとされている。

このように共産党政権の設立とその範囲の拡大に伴い，毛沢東の題字も増え，共産党政権の支配力の象徴として広く使用されていた。毛の題字は新聞だけではなく，学校，幼稚園などにも多く見られ，公共的空間で表象されている。例えば，1938年当時の抗日大学[16]のために「団結，緊張，厳粛，活発」の題字を書いた。また，上述したように整風運動のさなかに完成した中央党校大講堂の正面玄関の外壁には，毛沢東の肖像レリーフと自筆の「事実求是」のスローガンが掲げられた。実は中央党校の新しいホールが竣工した時に，最初は著名な歴史者である範文瀾氏に題字を依頼したが，範氏は，適当な言葉を思いつかなかったため，党校の人は毛沢東に依頼した。毛は２尺平方の四枚の麻の紙をもってきてしばらく考えて，「実事求是」を書いた。その後，石工が「実事求是」

の麻紙を 4 枚の石の板に乗せて原寸法で刻んでホールの上にかざるようになった。現在，その麻紙の実物は延安革命記念館で保存されている（劉 1992：122）。その後，「実事求是」は，マルクス・レーニン主義を学習するときの座右の銘となり，今日に至っている。毛の題字，「為人民服務」，「実事求是」は，いまでも政府機関の建物や街角に見られる。このように題字は，中国社会において重要な意味を持っている（高山 2008）。公共的空間に権力者の題字が頻繁に現れているのは題字は権威の現れだからである。

4.3 歌の中の毛沢東

毛沢東の影響力は，さまざまなルートで共産党の内外に浸透している。その中で歌は一つの重要な媒介である。

抗日戦争の時期に，毛沢東の名前は，救国ナショナリズムを象徴するような存在にもなり，その名前で命名された学校も現れた。初めて毛沢東の名前で命名された学校は，「沢東青年幹部学校[17]」といい，1940年に延安城北の大砭溝（文化溝ともよぶ）で誕生した，文字通りに青年幹部を育成する学校である。

1940年 5 月 3 日，毛沢東の名前で命名された「沢東青年幹部学校」の開校式が延安の中央大礼堂で行われた。毛と張聞天も出席した会場では，学校の教師と学生たちが「沢東青年幹部学校校歌」を歌った。この歌は，胡喬木によって作詞され，冼星海によって作曲されたものである。この校歌は中国共産党の歴史において，毛沢東を賛美する初期の歌の一つである。その歌詞は，以下の通りである。

生在英雄的时代，　英雄の時代に生まれ，
長在人民的旗下，　人民の旗の下に育ち，
毛沢東的双手，　毛沢東の手によって，
撫育我們長大，　私たちは成長してきた。
堅定意志，艰苦伝統，　固い意志，忍耐強い伝統，
革命精神，民主作風，　革命の精神，自由な気風。
我們学習虚懐若谷，　謙虚に学ぼう，
我們奮闘浩気如虹。　浩然と戦おう。
記住仇敵未平，　覚えておこう，敵はまだ滅びていない，
破碎河山未整，　砕けた山河はまだそのままだ。
同胞正在呻吟，　同胞は呻き苦しみ，
天下尚待澄清，天下は整うその日を待っている。
太阳照臨我們的肝胆，太陽は私たちの心を照らし，
大地傾聴我們的誓言，大地は私たちの誓いの声を聴いている。
願将熱血灌溉人间，私たちの願いは熱い血が人の世に注がれ，
結成自由春花一片　自由という名の春の花が一面に咲き誇ること。
（劉 1992：166）

上記の歌詞から，毛沢東は当時高まりつつある救国ナショナリズムの中で，英雄視され，求心的なシンボルになっていると同時に多くの英雄を生み出す存在となっていることがわかる。

また，1942年に当時革命根拠地となっている陝北佳県出身の貧しい農民であった李有源は，陝北の古い民謡『走西口』のメロディを元に独自の歌詞で『東方紅』を作った。歌詞のなかで，毛沢東は「赤い太陽」に喩えられ，「大救星」（世を救う偉大な星）として崇められている。つまり，民衆にとって，民衆を愛し民衆に幸せをもたらした毛は光りと暖かさをもたらし，万物を生み出す宇宙の太陽であり，天から降りて貧しい人々を救う使命を負う救いの神であった。この歌はその後半世紀にわたって中国で多くの人々に一番よく歌われてきた。特に文化大革命のころ，『東方紅』は国歌に準ずる地位に上り，政府の主催する会議や行事，学校や職場などの会議や儀式が始まる際に必ず歌われていた。この歌とともに，太陽は毛沢東のシンボルとして定着したと言える。

民謡から現在の『東方紅』になるまで，その歌詞の変化は，二つの段階があった。延安革命記念館で38年も仕事をしていた劉煜氏が筆者に次のように説明してくれた。『東方紅』のメロディは『走西口』から来たものである。それはもともと陝北地域の移民の間で歌われたもので，その内容は未婚の男女が恋の告白をするものであった。

騎白馬，跑沙灘	白い馬に乗り，砂浜を駆け回る。
你没婆姨我没漢	妻がいないあなた，夫がいない私。
咱們好像一都蒜	われわれは同じ束に編まれている大蒜のように，
誰也離不開辮	誰もが大蒜の束から離れられない。

抗日戦争のときに『走西口』の歌詞が次のように変わった。

騎白馬　挎洋槍	白い馬に乗り，鉄砲を肩に掛ける。
山哥哥吃的是八路軍糧	兄の俺は八路軍に入隊している。
有心回家看姑娘	故郷に帰ってお前に会いたいが，
打鬼子呀，顧不上	抗日のために顧みられない。

この段階の歌詞は，依然として恋する男女の心情を訴えている内容であったが，女性の気持ちを訴える前の民謡とは違って，抗日のために入隊した青年が恋人に会いたい気持ちを伝えている内容であり，また，抗日戦争という時代の背景が入っている。

その後の1942年に地元の農民出身の李有源（写真７）がさらにその歌詞を次のように変えた。

東方紅，太陽昇	東の空は赤く染め，太陽が昇る。
中国出了個毛沢東	中国には毛沢東が現れた。
他為人民謀幸福	彼は人民に幸福をもたらし，
他是人民大救星	彼は人民の救い星である。

この歌詞と抗日戦争初期の歌詞，さらに純粋な民謡の時の歌詞と比べ，明らかに異なり，男女の恋歌から完全に毛沢東を賛美する歌に変わった。

写真７　『東方紅』の作詞者，李有源　延安革命記念館
韓敏　撮影　2003年

5. 外国人ジャーナリストによる記述

中国共産党の指導者である毛沢東のイメージ，その影響およびそのカリスマが党外，国民党政権が支配した地域を含む中国の一般社会および海外へ拡大した背景には，エドガー・スノー[18)]のような海外のジャーナリストによる執筆活動が一定の役割を果たしたといえる。

陝西に到着し，紅軍の長征が終わった翌年の1936年，アメリカ人ジャーナリストのエドガー・スノーは，宋慶齢からの紹介状をもらい，上海の「チャイナ・ウィークリー・レビュー」誌の特約記者として，ただ１人，当時中国ソビエトの首府である陝西省北部の中共の拠点である保安に赴き４カ月間，中国紅軍と生活を共にし，指導者たちから無名の少年まで取材し，新しい中国を築こうとする人々のありのままの姿を記録した。スノーは中国共産党の根拠地と毛沢東を取材した最初の外国人ジャーナリストである。

1936年７月16日に，スノーは保安で毛沢東と会い，直接彼の半生を聞きだした。その年の11月14日，21日に上海の英文週報「蜜靳斯評論報」には，スノーによるインタビュー記事「共産主義リーダー，毛沢東との会見」と彼の撮った，八角軍帽をかぶった毛沢東の写真が掲載された。翌年の１月と２月，スノーは上海の英字新聞『大美晩報 Shanghai

Evening Post and Mercury』，北京の英文刊行物『民主』，アメリカの雑誌『アジア』，『生活』などで陝北共産党根拠地での取材記事を発表した。彼は毛沢東半生の取材ノートと上記の記事をもとに，30万字を越えた『Red Star Over China』（『中国の赤い星』）を1937年10月，ロンドンのVictor Gollanczで出版した。翌年の1938年に少し修正を加えたバージョンは，ニューヨークの Random Houseで出版され，同じ年の２月に上海で『西行漫記』という名前の中国語訳が出版された。この本は中共の政治運動の将来を肯定的に展望しつつ謎に包まれていた中共の根拠地の実態を生き生きとした筆で叙述し，国際的に高い評価を獲得した（田中 1999：600-601）。日本で完訳が出版されたのは，1952年の『中国の赤い星』が最初である（松岡 1995：398）。この本は，毛の「生涯に関するもっとも重要な唯一の資料」とされ，高く評価されている（シュラム 1967：７）。

『中国の赤い星』における毛沢東の記述は，次の３点にまとめることが出来る。毛は，①情熱的で，本質的な生命力をもち，未来を築く力を感じさせるカリスマ的指導者である。②共産党政権のトップに君臨しており，絶対的な権力と影響力を持ち，彼に匹敵する人物がほかにいない。③「不死身」を含むありとあらゆる奇妙な伝説の持ち主である。

スノーの「『中国の赤い星』は中国の革命勢力の実体を海外に紹介したばかりではない。1938年３月，上海で出版された『中国の赤い星』の中国語訳『西行漫記』は，中国の知識人の多くにとって初めて知る“紅区”であり，その後，学生など知識青年の延安入りを促すのに一役果たしたという」（松岡 1995：400）。

スノーによる毛沢東を含む中国共産主義者，紅軍，とくに長征に対する記述と評価の仕方は，のちに中国共産党自身による自分たちの歴史の語りかたに影響を及ぼしたと同時に，次，また次の世代の中国の人々に「歴史」として認識されていく可能性があると筆者は考える。その意味でこの本は「歴史を忠実に，そして生き生きとつづることによって，その歴史創りにも寄与した著作の１つであるといえるだろう」（松岡 1995：400）

5.1　軍・政府・党におけるカリスマ指導者

共産党政権および中国社会の中での毛の影響力について，「毛沢東は1936年に私があったときには43歳であった。彼は，赤い法律下（中国ソビエトの臨時憲法）にある約900万人民を代表する議員が参加した第２次全中国ソビエト大会で，臨時中央ソビエト政府主席に選出された……中国の共産主義社会全般にわたって，彼の影響はおそらく他の誰よりも大きいであろう。彼はほとんどの国家機関――革命軍事委員会，中央委員会政治局，財政委員会，組織員会，公共衛生委員会等々――に入っている……。彼の真の影響力は，党，政権，軍の政策に決定的な力を有する政治局を彼が支配していたことを通じて浸透した。誰もが彼を知り，尊敬していたのだが，少なくとも今までのところ，彼をめぐって英雄崇拝の儀礼は築かれていない。“われわれの偉大な指導者”といった文句を述べたてる中国共産党員に出会ったことは一度もないし，毛の名前が中国人民の同義語

として使われるのを聞いたこともない。しかし，“主席”――誰もが彼をこうよんだ――を尊敬せず，賛美しないような人にあったことは一度もなかった。革命運動における彼個人の役割は明らかに図りしれないものがあった」（スノー 1995：111-113）。このような記述からは軍・政府・党における毛沢東の指導者としての地位，圧倒的な影響力を窺うことができる。

ここで注意しておきたいのは，スノーが指摘した「主席」の固有名詞化の現象である。「主席」は，毛が死ぬまで，彼の固有名詞として中国で使われていた。現在でも多くの中国人にとって，「主席」はイコール毛沢東である。他の主席をいう時に，必ず個人名をつける。たとえば，胡錦涛主席などのいい方をする。

毛沢東のカリスマ的な指導力について，「中国の『救世主』が単数であるはずはないが，しかし彼のうちに未来を築くある力を感じたことは否定できない。それはすばやいものでも線香花火のようなものでもなく，一種の強固な本質的な生命力である。この人のもつ非凡さは，数千万の中国人，とりわけ農民の切実な要求を総合し，表現するには驚くほどたけていることにあると感じた」と指摘した（スノー 1995：107-108）。スノーは，毛沢東の偉大さと彼の率いた革命は「中国を再生し得る原動力」であることを感じ，そのように世界に伝えた。

5.2 伝説の記述

ここでもう1つ注目したいのは，毛沢東の「不死身」の伝説に関する記述である。「毛沢東の名前は蒋介石と同じく，多くの中国人になじまれていながら，彼についてほとんど知られておらず，ありとあらゆる奇妙な伝説の主であったからである……彼は不死身であるという評判であった……敵側は繰り返し彼の死を発表したが，数日後には相変わらず元気で新聞記事に復活するのであった……彼は数多くの戦闘に参加し，一度は敵軍に捕まえられたが，逃亡し，その首には世界最高の賞金がかけられていたが，この何年間かを通じ一度も負傷したことはなかったのである（スノー 1995：109-110）。

スノーによる毛の「不死身」の伝説に関する記述は，60年後に生成された毛の「百戦百勝」，「負傷したことのない」などの伝説と神格化の語りとは無関係ではないと筆者は考えている。

スノーが毛と会ったときは，ちょうど紅軍が1935年陝西に到着して，やっと1年にわたる長征を終えた翌年のことであった。中国社会における共産党政権の認知度が低く，また，陝西の地元における毛沢東の影響力はまだ十分ではなかった。共産党内部でも，外部の地元の人々でも毛沢東およびその政権に対して，公然と非難したり，批判したりすることもよくあった。当時は誰もがスノーが『中国の赤い星』で伝えた言葉を，毛沢東の本心にいちばん近いものと受けとった。それだけの説得力があった。スノーの執筆活動が毛のイメージの形成および社会への浸透に大きな役割を果たしたことは否定でき

ない。一方，スノーの観察は毛沢東崇拝の本格化前のものであり，いうまでもなく毛沢東崇拝の形成を考察する上できわめて貴重な資料となる。

6. おわりに

上記の分析からわかるように，毛沢東の指導者崇拝は，20世紀前半，社会主義近代国家の形成と中国ナショナリズムの台頭の中で形成された現象であり，そのなりたちには，軍事的，理論的カリスマ性が欠かせない要素である。毛沢東崇拝は，1942年から44年の整風運動の時期にまでさかのぼることができる（シュラム 1967：190）というのが一般的な見識であるが，筆者は，毛沢東のカリスマ性は1930年代の延安時代から中国共産党の内部から生み出されたものだと考えている。「毛沢東のカリスマの源泉がどこにあるのかを解明するのは方法論的に難しい。少なくとも言えることは，指導者としてカリスマを得る過程は，中共党内の主導権争いひいては20世紀前半の戦争と結びつけて考えなければならないということである」（金野 2008：56）。1930年代徐々に獲得した党・政府・軍における支配的地位と権力，農民運動，土地革命を中心とし，いくつかの危機を乗りこえる軍事的戦略と戦術，普遍性のあるマルクス・レーニン主義に対する中国共産党の新たな理論的挑戦，マルクス主義の中国化が毛沢東のカリスマ性を生み出す源泉であり，また毛沢東崇拝を生成するメカニズムでもある。

中国の近代ナショナリズムは，近代の資本主義世界化，そして資本主義的近代化のオルタナティヴとしての社会主義の世界化のなかで形成されたものである。「ヨーロッパが経験した近代の破壊的性格を反面教師として学べば，中国はヨーロッパ近代の積極的側面のみならず中国土着の要素をも利用してより良き近代を創造できるかもしれないという希望である」（ダーリク 1994：244-245）。毛沢東による中国社会の実情および文化遺産の重視は，脱ソ連の権力闘争によるとされているが，結果として，マルクス主義のグローバル化の中でのローカル化を実現した。

また，近代中国革命の本質は土地革命である。毛は農民問題に答えを出すことによって，マルクス主義の中国化，イデオロギーの権威を確立した。土地革命の成功は，彼の死後の農民主体の新たな神格化を作りだす主要な原因である。

中国共産党内から生み出された毛のカリスマ性がどのように一般社会に影響を及ぼしたのか？カリスマ性を中国国内社会で拡大再生産させる機能を果たしたのは，「おそらく建国後の政治儀礼や教育活動であろう」と金野は述べている（金野 2008：57）が，筆者は，紙幣，切手，刊行物などのメデイアによる肖像の大量使用，公的な場における題字，民謡，特に外国人記者による自伝や記事などが，建国前から毛沢東のカリスマ的指導者のイメージを一般社会にある程度拡大再生産する機能を果たしたと指摘しておきたい。また，抗日救国のナショナリズムの高まり，中国社会における共産党政権の拡大につれ

て，彼は，共産党の支配力，イデオロギー，ナショナル・シンボルとされ，中国社会に更に浸透するようになった。

毛沢東が亡くなって38年経った今，絶対的権威者としての神聖化は崩壊しているが，彼はナショナルズムの求心力，ネーション・ヒーロー，抵抗・郷愁のシンボル，平安の神，消費の対象とされ，国の為政者，救済と民族精神を求める民衆が毛沢東という無限の象徴資源から新しい意味を引き出そうとしている（韓 2014, 2011, 2009, 2008, 2007, 2005；Barme 1996；Han 1997, 2001；Chao 1999；Schrift 2001）。毛沢東記号の持つ多重のシンボリズムは彼自身の影響力，中国国内と国外の原因によって形成された部分があると考えられる。つまり，毛沢東に与えられているさまざまな意味合いは，彼がかつてさまざまな形で一つの思考体系，一つの時代を作り上げ，いろいろな人びとに多大な影響を与えたことを物語っている。

市場経済，脱イデオロギーの1990年代とグローバル化の21世紀において，毛沢東は政府によって歴史化され，共産党政権の創設者として表象され，現政権との連続性の演出に利用されている。

また，経済と文化のグローバル化の中で，かつてマルクス主義の中国化，抗日ナショナリズムの中で崇拝されていた毛沢東は，現在一部の民衆に，民族精神，時代の精神，文化ナショナリズムの源泉の一つとして求められている。毛沢東に民族の精神性，時代精神を求めている現象は，中国的価値観，中国的アイデンティティを再確認するための手段として捉えることができる。中国的価値観，民族精神の見直しという動きは毛沢東現象だけではなく，現在中国で起きている論語・孔子ブーム，三国志，道教を創設した道子ブーム，儒教的価値観の見直についてもいえる。

毛沢東崇拝は，近代の国民国家の形成過程，計画経済の社会主義時代から市場経済の社会主義への転換にともなう社会変化，グローバルの時代における文化的ナショナリズムの中で，議論すべき問題であり，また，決して社会主義中国特有の現象と捉えるのではなく，他の歴史時代，他の地域に生じたさまざまな指導者個人崇拝との比較を通して，指導者個人崇拝と社会変化との関連性，個人崇拝の本質をよりいっそう明らかにする指針となるであろう。

注

1）毛沢東（1893年12月26日～1976年９月９日）は中華人民共和国初代国家主席。哲学・思想家で戦略戦術家。詩作でも知られる。1893年，湖南省湘潭県韶山村の農家の長男として生まれた。

2）狭義の五・四運動は1919年のヴェルサイユ条約の結果に不満を抱き５月４日発生した北京から全国に広がった反日，反帝国主義を掲げる大衆運動を指す。広義の場合，五・四運動先立ち1915年以来展開されていた反伝統主義の「新文化運動」をもふくむ。

3）コミンテルン（Comintern）は，共産主義の国際組織である。1919年３月，モスクワで結成さ

れた。この組織は「世界のブルジョワジーを打倒するために，さらに国家の完全な廃止に向けての過渡的段階としての国際的ソビエト共和国の建設のために軍事力を含むあらゆる可能な手段によって」戦うことを意図していた。

4）1925年５月30日に中国・上海でデモに対して租界警察が発砲し，学生・労働者に13人の死者と40人余りの負傷者が出た事件。

5）ソビエトは，本来はロシア革命の際に社会主義者を中心とした革命派によって作られた労働者・農民・兵士の評議会である。20世紀前半の中国では，共産党政権として使われていた。たとえば，中華ソビエト（蘇維埃）共和國は，1931年11月７日に江西省瑞金を首都として中国共産党が樹立した政権である。主席は毛沢東。共産党軍が国民党軍の包囲から脱出し，長征に出る1934年10月に事実上消滅した。

6）当時，中国共産党の中で，「毛沢東思想」の代わりに，マルクス主義，レーニン主義と並んで「毛沢東主義」を使用した方がよいと主張した人がいたが，毛沢東自身は，「毛沢東思想」の表現は妥当だと指摘した（毛　1948）。以来，中国では，「毛沢東思想」の言い方は今日まで至っている。

7）張如心（1908～1976年）広東興寧県。1931年５月中国共产党に入党。1926年２月ソ連モスクワの中山大学留学。1927年２月から中山大学の教员と通訳を兼任。1929年11月帰国し，上海で中国社会科学家联盟を成立し，研究部部长に就任。マルクス主義のプロパガンダに従事し，『哲学概论』を編著。1931年８月中央革命根据地に行って中国工農民紅軍に参加。中央革命軍事委员会総政治部『紅星』主編。1936年から紅軍大学主任政治教員。 1937年８月から中国人民抗日軍事政治大学政治教育科科长。軍政学院教育长，中央研究院中国政治研究室主任，中共中央党校三部副主任，延安大学副学長。1941年３月に「毛沢東同志的思想」の言い方を提起した。

8）王稼祥（1906-1974），安徽宣城泾県厚岸村人。1925年９月中国共産主義青年团に入团。同年冬，ソ連モスクワの中山大学に留学。 1928年モスクワの紅色教授学院に入学。同年２月中国共産党に入党。1930年３月上海に戻り，中共中央宣伝部幹事。

9）導師は仏教を教える指導者。また，葬儀を執り行う最上位の僧侶。現代中国において，導師は革命の方向性と政策を示す存在を意味し，毛沢東のみに使われている。

10）1941年賀龍の120師が方山県で日本人からマッチを生産する梗片厂を接収した。それを基盤に1944年３月陝甘寧辺区火柴厂が延安揚家湾狄監楼村で創設された。

11）日常用品における孫文シンボルの使用は陳蘊茜の「中山符号日常化与空間重組」『崇拝与記憶』（南京大学出版社　2009）で詳しく記述されている。

12）1939年９月１日毛は，延安鳳凰山，平房里にある書店のために「新華書店」の題字を送った。その後，毛は，1946年，1948年２回西柏坡で「新華書店」の題字を書いた。現在，使用されたのは，1948年に書いたものである。

13）その後，この新聞は，『群衆日報』に改名された。

14）1949年５月27日，共産党軍が上海解放を宣言し，中国共産党が上海の実効支配を開始した。その翌日の28日に『解放日報』が中国共産党上海市委員会の機関紙として創刊された。上海で創刊された「解放日報」も依然として毛沢東の題字を使い，今日に至っている。

15）この新聞紙の趣旨は，東北地域の民衆に愛国主義の教育を行う同時に，蒋介石と戦う中国共産党の歴史を紹介し，土地改革を宣伝するものである。

16）抗日戦争のニーズに適応するために，中国共産党は1936年６月１日陝西省瓦窯堡で中国の抗日紅軍大学を創設した。1937年所在地が延安に移り，学校名は抗日軍政大学に変わった。

17）陳雲が校長，冯文彬が副校长，胡乔木は教務主任となる。全校は６つの班，高級班，２つの普

通班，陝北干部班，军事班，儿童班によって構成されている。主要なコースは，マルクス・レーニン主義，政治経済学，国際問題，中国歴史などがある。学制は１年となる。卒業後の学生は中国各地に派遣され，青年工作に当たる。その学校の前身は，「安呉青訓班」である。1937年「蘆溝橋事変」の後，中共中央が抗日戦争のニーズに応じて，涇陽県の雲陽鎮で抗日のための青年幹部を育成する訓練班を作った。第四期以降，蒋路郷の安呉堡村に移ったため，安呉青訓班と改名された。1939年後半から，エスカレートした国民党の襲撃によって，「安呉青訓班」が1940年４月13日延安に戻り，「沢東青年幹部学校」に改名された。

18）スノー，エドガー（1905年７月19日～1972年２月15日）はアメリカジャーナリスト。1928年世界一周旅行の途中，上海で「チャイナ・ウィークリー・レビュー」誌の特約記者となる。スノーは1936年に最初に毛沢東に会見し，その後の1939年，1960年，1965年，1970年にも毛と会見を続けた。中国共産党に関する数多くのエッセーを執筆した。

参考文献

（英語）

Barme, Geremie R.

1996 The Irresistible Fall and Rise of Chairman Mao. Barme G. M. E.（ed.）*Shades of Mao: The Posthumous Cult of the Great Leader*, pp. 3–73. Sharpe New York: East Gate.

Chao, Emily

1999 The Maoist Shaman and the Madman: Ritual Bricolage, Failed Ritual, and Failed Ritual Theory. *Cultural Anthropology* 14(4): 505–534.

Han, Min

1997 Tourism in Shaoshan, Mao Zedong's Home Village: From Revolutionary Memorial to Multi-Purpose Tourist Attraction. In S. Yamashita, K. H. Din, and J. S. Eades（eds.）*Tourism and Cultural Development in Asia and Oceania*, pp. 141–163. Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.

2001 The Meaning of Mao in Mao Tourism of Shaoshan. In Tan Chee-Beng, Sidney C. H. Cheung and Yang Hui（eds.）*Tourism, Anthropology and China*. pp. 215–236, Bangkok: White Lotus Press.

MacFarquhar, Roderick

1974 *The Origins of the Cultural Revolution–1.* New York: Columbia University Press.

Schrift, Melissa

2001 *Biography of a Chairman Mao Badge: The Creation and Mass Consumption of a Personality Cult.* New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Snow, Edgar

1937 *Red Star over China.* London: Left Book Club, Victor Gollancz.

（中国語）

陳蘊茜

2009 「中山符号日常化与空間重組」『崇拝与記憶――孫中山符号的建構与伝播』南京：南京大学出版社。

高華
2000　『紅太陽是怎様昇起的 ── 延安整風運動的来龍去脈』新界：香港中文大学出版社。
韓敏
2011　「被旅游化的毛沢東」山下晋司編，孫潔，伍樂平訳『旅游文化学』pp. 67-80　昆明：云南大学出版社。
吉壇
2001　「聖火簇擁」袁福堂，王毓華，樊俊成編『陝北民俗集趣』pp. 95-99，西安：華夏文化出版社。
劉煜
1992　『聖地風雲録 ── 延安革命記念館陳列内容紹介』西安：陝西旅遊出版社。
麦克法夸尔著，魏海生等訳
1990　『文化大革命的起源』北京：求実出版社。
毛沢東
1948（1996）「不同意毛沢東主義的提法」『毛沢東文集　第５巻』pp. 123-126，北京：人民出版社。
王進等主編
1992　『毛沢東大辞典』南寧：広西人民出版社，桂林：漓江出版社。
王若水
2002　『新發現的毛澤東：僕人眼中的偉人』香港：明報出版社。
中央檔案館
1984　『毛沢東題詞跡選』北京：人民美術出版社，檔案出版社。

（日本語）
岩間一雄
2007　『毛沢東 ── その光と影』東京：未来社。
ウェーバー・マックス
1996　「カリスマ的支配とその変形」『現代社会学大系　第５巻　ウェーバー社会学論集』東京：青木書店。
川田進
2000　「毛沢東像の誕生 ── 個人崇拝への道」牧陽一，松浦恒雄，川田進『中国のプロパガンダ芸術 ── 毛沢東様式に見る革命の記憶』pp. 101-131，東京：岩波書店。
金野純
2008　『中国社会と大衆動員：毛沢東時代の政治権力と民衆』東京：御茶の水書房。
韓敏
2014　「毛沢東バッジの語りと活用」武内房司，塚田誠之編『中国の民族文化資源南部地域の分析から』pp.25-62，東京：風響社。
2009　「儀礼と象徴 ── 毛沢東生誕110周年の記念行事を中心に」韓敏編『革命の実践と表象 ── 現代中国への人類学的アプローチ』pp. 367-397，東京：風響社。
2008　「韶山の聖地化と毛沢東表象」塚田誠之編『民族表象のポリティクス ── 中国南部における人類学・歴史学的研究』pp. 225-261，東京：風響社。
2007　「観光化される毛沢東 ── 中国観光を作り出すしかけ」山下晋司編『観光文化学』pp. 59-64，東京：新曜社。
2005　「毛沢東の記憶と神格化 ── 中国陝西省北部の『三老廟』の事例研究にもとづいて」『国立

民族学博物館研究報告』29(4)：499–550。
シュラム S.
1967 『毛沢東』石川忠雄，平松茂雄共訳，東京：紀伊国屋書店。
エドガー・スノー
1995 『中国の赤い星　上』松岡洋子訳，東京：ちくま学芸文庫。
野村浩一
1978 『人類の知的遺産　76　毛沢東』東京：講談社。
ダーリク・アリフ
1994 「毛沢東思想における近代と反近代」新田義弘ほか編『近代／反近代』岩波講座現代思想(14)，東京：岩波書店。
高山陽子
2008 「題字の意義――中国におけるモニュメントの分析から」『国際関係紀要』（亜細亜大学）17：51–92。
田中仁
1999 「スノー，エドガー」天児慧，石原享一，朱建栄，辻康吾，菱田雅晴，村田雄二郎編『岩波　現代中国事典』pp. 600–601，東京：岩波書店。
内藤陽介
1999 『マオの肖像――毛沢東切手で読み解く現代中国』東京：雄山閣。
松岡洋子
1995 「訳者あとがき」エドガー・スノー『中国の赤い星　下』東京：ちくま学芸文庫。
毛沢東
1926（1968）「中国社会各階級の分析」『毛沢東選集第1巻』pp. 3–17，北京：外文出版社。
1927（1968）「湖南農民運動考察報告」『毛沢東選集第1巻』pp. 19–72，北京：外文出版社。
1938（1968）「民族戦争における中国共産党の地位」『毛沢東選集第2巻』pp. 279–280，北京：外文出版社。